

クリストフ・シュテルツル 『カフカの邪悪なベーメン

—あるプラハ・ユダヤ人の社会史のために—』(2)

伊藤 勉 訳

第3章 1883年から1924年までの反ユダヤ主義時代におけるユダヤ人 中産階級

カフカの生まれた1883年は、オーストリアにおける反自由主義的傾向への方向転換^(訳注一)を考える上で、特に注目すべき年である。即ち、この年は経済不況の頂点であり、至る所で大衆の困窮がみられ、市民社会は——オーストリアの市民社会は主にドイツ人及びドイツ系ユダヤ人の市民社会だった——無政府主義的な行動や迫り来る社会革命の大波によって揺すぶられていた⁽¹⁾。「どのブルジョア家庭でも……人々の表情には不安の色が浮んでいる。(……) この呪われた国には至る所に紛争の火種がある……」⁽²⁾と1882年11月、社会主義者カール・カウツキーはヴィーンからロンドンのFr・エンゲルス宛てに報告している。当時、政権についていたのは優柔不断で保守的なターフェ内閣であった^(訳注二)。この内閣は、あらゆる方向にむかって触手を伸ばし、政治的な権力は失ったものの出版界にはまだ君臨していたドイツ自由主義と戦う上での援軍を求めている。更に、「興奮と煽動の裡にユダヤ人問題が大学と教会を征服した」⁽³⁾ ドイツでの反ユダヤ的動向、「ユダヤ人を撲滅することによってニヒリズムを撲滅することができる」⁽⁴⁾と信じた、ある政府が仕組んだ南ロシアでの恐るべきポグロムの知らせ、そしてハンガリーからは反ユダヤ政党が結成されつつある、という報告がもたらされた。

ヴィーンの『トリビューネ』紙が——これは帝都におけるチェコ政治の代弁者であり(国家の援助を受けていたせいで)公然たる政府よりの新聞

だったが——ハンガリーにおける反ユダヤ的運動について、「このように広範な運動を、嫉妬やキリスト教徒の〈貪欲〉のせいにするのは、実際のところ不適當であろうし、それ故、もう一方の側に責任があるのではないか調査を行ってみるだけの価値はある。そして、その結果によっては、法的な予防措置を講ずるべきだろう」⁽⁵⁾と書いたのは、いかにも脅迫的な響きを伴っていた。「もう一方の側」の罪については、今やウィーンで活発に議論が行なわれていた。1年前から小市民階級は、ただ単に経済恐慌の犠牲者としてでなく、新しい政治的主体として自らの地位を自覚し始めていた。つまり、ターフェ内閣による選挙法改正によって1882年9月、下層中産階級にまで参政権が与えられたのである。1882年から83年冬にかけて、〈オーストリア改革連合〉が一躍脚光をあび、巧みな宣伝によって小市民階級の政治的不安を大規模な大衆集会に結集することに成功した。社会的に抑圧された集団の、不満の吐け口としての反ユダヤ主義が活動を開始した。反ユダヤ主義がまとう民主主義的な衣裳は、政治闘争の炎を燃えたたせる油ともなった。

「民衆が彼らの利益を妨害する時、これらの〈リベラルな〉一派がいかに安直に武力行使に訴えるかを実際に経験してみたいという人は、反ユダヤ運動が勃発するのを待つがよい。そして民衆が法的規制を破ってユダヤ人に打ちかかっているのを見ているがよい。そうすれば、『新自由新聞』を先頭にした一派が、警察や軍隊に武力の出動を要請するのが見られるだろう。これらリベラルな連中は、警察や軍隊が〈街頭の賤民〉を即座に鎮圧しない限り、彼らが充分な働きをしたとか、義務に忠実だったとは認めないのだ。ユダヤ人に対して投石がなされる場合には、これを鎮圧するために、警官はいくら賤民に殴りかかってもいいし、槍騎兵はいくら暴れてもいいし、歩兵はいくら射ってもいい、とされるのだ」⁽⁶⁾

帝都ウィーンにおける新しい政治運動のイデオロギーは、1882年12月5日のウィーン商業者連合の大規模集会でのスローガンから窺うことができる。そこにいわく、「ユダヤ人問題さえ解決すれば、オーストリアに民族問題は存在しない。キリスト教徒の店でだけ買うことにしよう。ユダヤ人

解放令は撤回さるべきだ」⁽⁷⁾。こうした議論の核心をなしていたのは、反ユダヤ主義が諸民族・諸階級を団結させる、なぜなら貴族から労働者に至るまですべての社会集団がこの運動に参加しているのだから、というオーストリア的なユートピアへの期待であった。しかし、この新しい運動がいっそう高次の聖別をうけたのは、1883年、はじめて現代的な装いの下に登場した犠牲殺人キャンペーンにおいてであった。一体、何がおこったのか？この集団的ヒステリーはハンガリーの小都市ティスチャ・エスチュラールでの混乱した裁判から始まった。この町で、あるキリスト教徒の少女が、宗教的な理由からユダヤ人によって殺害された、とされたのである⁽⁸⁾。プラハ大学のある神学教授の登場によって、この事件は諤諤たる議論の的となった。このローリング教授がタルムード^(訳注三)から読みとったと主張し、そして正式な誓約書付きの鑑定書とパンフレットによって公にしたことは、まことにセンセーショナルな内容を含んでいた。ローリングは1882年11月、次のように語った。「ユダヤ人は、彼らの宗教の定めるところによって、すべての非ユダヤ人をあらゆる手段で搾取し、物質的・道徳的に破滅させ、非ユダヤ人の名誉と財産を破壊することが認められている。彼らがそうするにあたっては、公然と暴力を用いる場合もあるし、秘かに闇討ちに似た手段を用いることもある。ユダヤ人は、宗教的理由によって、このような所業に及ぶことが許されている、否、むしろそうするよう定められているのだ。このような事実に鑑みて、我々にはユダヤ人問題の法的処理を要求する権利が確実に存在する」⁽⁹⁾。

こうした発言は、ユダヤ人が資本主義に不可欠の酵母として重要な役割を果たしていたオーストリアにあっては、経済恐慌の原因を手軽に説明するのに好都合だった。こうした発言によって、〈ユダヤ的〉資本主義に対する小市民的な商工業者の反対運動は歴史神学的な衣裳をまとい、悪に対する善の永遠の戦いという聖別が与えられたのである。ローリングの書『タルムードのユダヤ人』や彼の煽動文書は、ウィーンの小市民的大衆運動のイデオロギー的な武器として版を重ねた。そして1883年、ウィーンのこうした大衆運動の中から、後に民族社会主義の精神的父となる二人の人物が、彼らの政治的経歴を開始した。即ち、民族的人種主義者シェーネラー^(訳注四)とキリスト教的・社会主義的反ユダヤ主義者ルエーガー^(訳注五)である。

シェーネラーは彼の人種論的反ユダヤ主義を、教養市民層に巢食う競争不安を政治問題化するための手っ取り早い道具へと造り上げた。ユダヤ人知識人が、人種論を笑いものにするにはもはやできなくなった。自由主義の全盛期には、ウィーンの解放派ジャーナリストのシモン・スツェントはあるユダヤ・カレンダーで、学問的な装いをこらしたユダヤ人識別法をまだ笑いものにするのができたのだが。

「自然科学者はユダヤ人の民族的特徴を匂いでかぎわける。法律家は縁なし帽や上着を手がかりにする。言語学者は言葉の誤用や逸脱を手がかりにしてユダヤ人を識別する。つい先頃、ユダヤ人の足が、動物の足を調べるように研究された。そして比較解剖学の見地から、あるドイツ人学者が幸運にも、ユダヤ精神を測定する信頼すべき規準を、つま先と踵から見つけ出した。また数週間前、ある才能ある哲学者が、民族性は女性の腰と男性の帽子のかぶり方からはっきりと認識できるという発見を成し遂げた。更に彼は、ユダヤ人女性の腰の形が現在とは違った形状にならない限り、ユダヤ人の解放など考えられない、という結論に到達したのである」⁽¹⁰⁾

しかし今や、人種論は帝都の学界にしっかりと根を張るに至った。即ち1883年、学生だったテオドーア・ヘルツルは、彼の所属する学生組合が反ユダヤ・デモに参加したために、この学生組合を脱退している^(訳注六)。

さて、ベーメンの状況はどうだったか？ 1882年の時点では、ベーメン・ユダヤ人の代表者たちはまだ安心感に浸っており、「我々の愛する祖国ベーメンは、こうした邪悪な中世的蛮行を寄せ付けない」⁽¹¹⁾ と思っていた。しかし1883年には、ハンガリーの反ユダヤ主義指導者たちと青年チェコ党幹部の間で秘密会議がもたれ、その会議の中で「青年チェコ党こそチェコ人の精神的特性を真に代表する党である。それ故、青年チェコ党は、すべての民族に脅威を与えている現代ユダヤ主義を討つ十字軍に参加する用意がある」⁽¹²⁾ という見解が表明された。ウィーンの小市民的大衆運動とベーメン政界のパイプ役を果していたのは、チェコ民族主義の最もいかがわしい人物の一人で、かつて青年チェコ党幹部の一員だった出版者スクレ

イシュオフスキーであった。1883年以降、彼はドイツ語とチェコ語の反ユダヤ的通俗文学を大量に出版した⁽¹³⁾。こうした出版物が好んで受け入れられる土壌も存在した。オーストリア社会の不穏な空気からすれば、それは何ら不思議ではなかった。「裕福なユダヤ人に対する反感をかきたてることによって、支配階級に向けられる社会運動の矛先を逸らし、無害化する」⁽¹⁴⁾ 意図がそこには潜んでいたと思われる。1883年、プラハで行なわれた政治意識調査は次のように述べている。

「信頼できる筋の報告によれば、小規模自営業者たちや労働者たちは、このところ低俗な飲食店に集って、ロシアやガリチアでのユダヤ人迫害を好んで話題とし、しかもこうした迫害に喝采を送っている。更には、ユダヤ人たちが小規模自営業者や労働者を圧迫しているというので、プラハでもユダヤ人を排撃すべしという要求さえ出ている。彼らを煽動しているのは社会主義者ではなく、民族主義者のグループである。というよりむしろ、ほんの僅かなきっかけによって、ユダヤ人工場経営者に対する労働者階級の攻撃的行動が、いつ勃発しても不思議はないほど既に社会不安は昂進しているというべきだろう」。

1883年春、プラハではドイツ語とチェコ語による反ユダヤ的パンフレットや脅迫状が撒かれたが、そこには次のような文句が見られる。「主よ、天国は素晴らしい所です／そこには一人のユダヤ人もいません／しかしその代り、この地上ではユダヤ人は日毎に増えてゆく／汝ら、実直誠実な者たちよ／棍棒を手に取り、ユダヤ人たちを殴り倒せ／ユダヤ人が一人もいなくなった時はじめて／平和が訪れるのだから」⁽¹⁵⁾。

1883年夏、ベーメンを席捲した反ユダヤ主義の大波はチェコの政党の党略に巧妙に利用された。即ち、チェコ人の有力ブルジョアの政党である〈老年チェコ党〉の発表した擬装的な和解宣言と、青年チェコ党幹部によって密かに撒かれた反ユダヤ文書による不安煽動キャンペーンが効を奏して、1883年の州議会選挙ではベーメンのユダヤ人有権者はチェコ人の側についた。1883年夏には、4年前のウィーンでそうなったように、ドイツ自由主義の優位はベーメン議会でも失なわれたのである。これをもって〈ド

イツ系ベーメン〉の時代は最終的に終りを告げた⁽¹⁶⁾。

ブルジョア政治が反ユダヤ主義運動の伸長力にいかにか魅せられていたかは、1883年秋、ハンガリーとチェコの政治家、それにこれに共感するヴィーンの政治家たちの間で再度、〈反ユダヤ主義を共通の土台とする諸民族の宥和〉⁽¹⁷⁾が大真面目に議論されたという驚くべき事実からも推測できよう。炯眼な観察者たちは、事の成り行きの本格的な新しさと脅威を見逃さなかった。それはこの運動に見られる、従来の制約を踏み越えてゆくパワーと、政治の番犬、つまり政治の〈手段〉たることを止め、ひとつの独立した政治運動へと発展してゆく潜勢力であった。ベーメンに隣接するザクセンのケムニッツ（現在の東ドイツ、カール・マルクス・シュタット——訳者注）で開かれた最初の〈反ユダヤ主義会議〉も1883年夏、これがはっきりと〈国際的な〉催しであることを表明したし、ドイツ系ベーメン地域にその触手を伸ばそうとしていた。

ユダヤ人政治家たちは嘆いた、「虚妄は長くは続かなかった。ティスチャ・エスチュラールで、我々の期待は、風に吹き散らされる霧のように、あえなく吹き消されてしまった。理性的な運動に対しては、こちらでも理性によって対抗することができる。しかし邪悪な本能に対しては抗する術がない。邪悪な本能は疫病のように広がり、それにはどんな検疫も無力だ。エスター・ソリモシが行方不明になった日、我々の20年に及ぶ政治活動は無に帰してしまっ……」⁽¹⁸⁾。

この新しい政治運動にみられる、社会全体の自由を脅かすような全体主義的傾向は、既に早くから注目されていた。

「彼らは自分たちのことを反ユダヤ主義者と称している。彼らは人種による権利の相違という野蛮な掟を唱え、血なまぐさい暴力を現代国家のひとつの要素に祭りあげる。ユダヤ人たちはこの新しい教説の実験台である。しかし結局のところ、ユダヤ人のどういう点が問題だというのか？ ユダヤ人を暴力でうち負かすことだけが目的とされているのなら、反ユダヤ主義は破廉恥な卑劣行為であり、巨人が小人を相手にするにも等し

い。しかし、反ユダヤ主義には別の側面もあるのではないか。つまり、法律によってユダヤ人に賦与されているにも拘わらず、ユダヤ人から奪うことのできるもの、即ち、人格の保全や国家における同等の権利・義務、こうしたものは場合によっては、同じくこれらが法律によって保証されているユダヤ人以外の人々からも剥奪することができることを見落してはならない」⁽¹⁹⁾

むろん当時においては、チェコの政情はこうした疑惑には関知しなかった。チェコ人は、ユダヤ人の動揺によって最後のドイツ人選挙区プラハがチェコ民族派に投票したという事実を歓迎し、それ以降のユダヤ人の方向転換を——このことは使用言語の統計調査にも表われている——、ユダヤ人の親愛感の表明としてよりも、むしろチェコ民族主義の勝利の証拠として歓迎した。1880年以降、新たに導入された日常使用言語統計調査は、個人の〈民族的帰属性〉、政治的立場を、それらが選挙戦の過程で明らかになるよりもはるかに精確に測定する政治的道具となっていた。ユダヤ人家庭のドアの奥で、公的な調査表に記載されている言葉が実際に話されているかどうか、隣人の間でのスパイ活動が始まった。そして今や、チェコ人地域に住むユダヤ人たちは、株式情報を知るために必要なドイツ語新聞を厳封した上で送らせるようになった。こうした一連の出来事は、ユダヤ人の超国家的な活動空間を更に狭めることになった。1880年にはベーメン・ユダヤ人の $\frac{1}{3}$ がチェコ語を日常使用語として申告しているが、1890年にはその割合は既に5割を越えている。1880年から90年の間に、プラハ市内の4000人以上のユダヤ人が彼らの民族的帰属性を変えた。1890年、プラハではユダヤ人の74%がドイツ語を日常使用語と申告しているが、1900年にはそれが45%にまで低下している⁽²⁰⁾。

それにも拘わらず、統計の示す数字は、国内での勢力関係について、ユダヤ人の表向きの民族的所属性が示す以上のことを語っている。即ち、学校と大学に関する統計によれば、ユダヤ人のうち、チェコ語を使用する教育機関に通っているのはほんの少数にすぎないのである。1900年の時点では、ユダヤ人全体の9割が自分たちの子弟をドイツ語の学校に通わせている。1900年にベーメンを出身地として挙げたヴィーン在住のユダヤ人

28,152名のうち——しかもこれらの人々のうち数千名は確実にチェコ語地域の出身者なのにも拘わらず——、母語としてチェコ語を挙げた者は僅かに73名にすぎない⁽²¹⁾。ドイツ語・チェコ語の2カ国語使用はほんの少数の家庭で行なわれていたが、彼らはチェコ派ユダヤ人運動に積極的に加わり、この時代になって初めて、逡巡しながらも公的な場面に登場しはじめていた。ヘルマン・カフカもこうした家族に属しており、彼は1880年代には、チェコ語の礼拝が行なわれた最初のジナゴークであるハインリッヒ・ジナゴークの世話役を務めている。この時代、ヘルマン・カフカがいかなる動機から自分をチェコ派ユダヤ人として宣伝したのか？ M・ブロートが漠然と推測したように、ヘルマン・カフカは「断固としてというのではないが、ある程度までチェコ人の党に共感を示していた」⁽²²⁾のか、それとも新参者の彼は（彼は1880年にプラハに出て来た）、勝利感に沸き立っているチェコ人側に組したほうが有利なことを本能的に察知したのだろうか。ともあれ、ひとつだけ確実に言えることは、ベーメン・ユダヤ人のチェコ化の程度は、彼らの経済状態の推移と直接的な関係にあったという事実である。つまり彼らが貧困化するに依じて、いっそうチェコ語を日常使用語として申告する傾向が高まり、彼らが経済的に上昇するにつれて、周囲世界の社会的圧迫から解放されて再びドイツ語使用に傾いたのである。しかし彼らがそのように振舞わず、身の安全を図るために引き続き——ヘルマン・カフカがそうしたように——自らを〈チェコ人〉として申告したとしても、次の世代にはドイツ語による教育を受けさせたほうが、完全にチェコ化するよりも、最終的にはリスクが少ないと彼らは考えたのである。それ故、フランツ・カフカは1889年、フライシュマルクトにあったプラハ・ドイツ小学校に送られた。

こうした矛盾は、疑い深いチェコ人社会に知られずすむはずはなく、ユダヤ人が民族的変節者だという嫌疑をくりかえし招く契機となった。かくて、チェコ派ユダヤ人運動はやっかいな前提をかかえたまま出発することになった。この運動は、チェコ人たちがもともとユダヤ人の領分として敵視していたもの、即ち資本、経済的影響力、工業力、出版事業をチェコ人の陣営にもたらすことができなかつた。それ故にこそまた、この運動は誇張されたチェコ国粹主義——それはまず当然ながらドイツ系ユダヤ人に

向かって発揚された——を掲げることによって、おのれの門出を祝おうとした。チェコ語地域において、ほとんどすべてのドイツ系ユダヤ人私立学校が不当なやり方で急速に閉鎖されていったのがこの運動の成果であった⁽²³⁾。

1880年代の中頃、チェコ派ユダヤ人の中で擬似政党的な組織が結成された。この組織は〈本物の〉チェコ民族に対して、自分たちが誠実なチェコ人であることを顕示することを唯一の目標にしていた。1891年、政治的な地滑り現象によって青年チェコ党が選挙で華々しい勝利を収めた後、ユダヤ人による、チェコ側への大量加入ブームが起きた⁽²⁴⁾。しかしこの動きは、ユダヤ人問題に関する青年チェコ党の考え方の転換——これはありそうもないことだった——に対して、突然に信頼感が芽生えたためというよりも、むしろ、新たに国家の政治的支配者となった者に対して、社会的・国家的な保護を求める絶望的な希求であった。それにも拘わらず、青年チェコ党に加入したユダヤ人の期待は実現されなかった。チェコ人の党スポークスマンはユダヤ人に向かって、ドイツでは人種差別が行なわれているが、ベーメンでは「ユダヤ人が軌道を逸れるや否や政治的な闘争が行なわれる。その結果、敵対関係もまた消滅する」⁽²⁵⁾と、くりかえし偽善的な美麗句を並べたてていたが、それはチェコ派ユダヤ人が思い描く素朴な〈幸福への意志〉に訴えかけた。チェコ派ユダヤ人たちは、自分たちの置かれた不条理な立場をイデオロギー的に納得するために、次のような仮構に助けを求めた。つまり、反ユダヤ主義という疫病は、その本来の病巣がドイツ国粹主義にあり、そこから、根本的には清純で寛容、かつ進歩的なチェコ民族にまで病気が伝染してきたものである、と彼らは考えようとしたのである。こうした自己欺瞞がどのくらいの期間有効だったか言うのはむつかしい。何はともあれ、こうした自己欺瞞は、1890年頃に政治に参加した世代が、ついそれ以前までのチェコ人とユダヤ人の関係を隠蔽したことによって生じた現象として説明されうる。現実にははっきりと、自己欺瞞の無効性を突き付けていた。青年チェコ党へのユダヤ人の糾合は、はかばかしく進まなかったし、地方官庁や貯蓄銀行といった国内の行政面で自治的な民族的機関が、ユダヤ人の採用に対して門戸を閉す傾向はいっそう顕著となっていた。青年チェコ党右派は、ウィーンのキリスト教的社会主義

大衆政党の反ユダヤ主義と緊密な連絡を取っていた、札付きの反ユダヤ主義者たちに牛耳られていた。1891年、ベーメン州博覧会開催の折、青年チェコ党の反ユダヤ主義者バクサ、ヴァシャティ、ブジュズノフスキーの企画によって、ウィーンの反ユダヤ主義者シュナイダーの、人眼を憚らぬ、ほとんど公式のといってよい友好訪問が行なわれた。このシュナイダーは〈ユダヤ人射殺金〉の要求によってオーストリア全土に悪名高い人物だった。

ドイツ系ベーメン工業地帯での政治的反ユダヤ主義は、もう少し後に別の形で現われた。その理由は、社会民主主義が、無政府主義的かつ擬似民主主義的な傾向をもつ政治的反ユダヤ主義がいかに危険な競争相手であるかを逸早く見抜き、計画的に労働者階級の思想教育に取り組んだことにある⁽²⁸⁾。シェーネラーの民族的人種主義は、彼と彼を信奉する学生グループが何度も宣伝活動旅行を重ねた後ようやく根を下した。それというのも、チェコ人と比べて、遥かにのんびりとしていたドイツ系ベーメンの小市民階級は、自由主義的な大ブルジョア政治家による支配から解放されるのが遅かったからである。しかし、撤かれた種子がいったん芽を出すと、その根の張り方はそれだけ深かった。西ベーメンの人々は1890年代の初頭以来、ドイツ急進主義の先頭に立っていた。オーストリアにおける汎ドイツ主義の主唱者の大多数がエガーランド（現在の東独・西独国境に近いチェコの地域、つまり西ベーメン——訳者注）の出身だった⁽²⁹⁾。後には、煽動的才能に恵まれたカール・ヘルマン・ヴォルフ（シェーネラーの協力者——訳者注）の出た東ベーメンのトラウテナウ（現在のポーランド国境に近いチェコの町——訳者注）もこれに加わった。ヴォルフは、彼の汎ドイツ主義的政策にも拘わらず、彼のユダヤ人敵視がチェコ人の共感を呼んで多くのチェコ人票を獲得したことをくりかえし自慢した。信奉者は絶えず増大した。90年代には既に至る所で、非人間的な民族主義的言語規制が行なわれ、ユダヤ人の〈似非ドイツ人ぶり〉(Daitschtum) や〈モーゼの信仰を奉ずる輩〉に対する陰險な揶揄がしきりに加えられた。西ベーメンでは80年代に、反ユダヤ的ないたずら者たちが、ユダヤ人専用の〈家畜運搬車でのパレスチナ行き無料片道切符〉と記されたオーストリア鉄道の模造切符を作った⁽³⁰⁾。

ただドイツ系プラハの社会的・政治的構造だけが、旧来の市民的自由主

義の遺制を温存していた。従って、M・ブロートやP・アイスナーによる〈三重のゲッター〉についての報告、即ちドイツ系プラハの中でのユダヤ人の孤立や「意図的に曖昧なままに、維持されていた純血種主義の原則」⁽³¹⁾の支配についての彼らの報告とは趣きを異にして、こうした現象は問題とするに足りなかった。プラハのドイツ系大ブルジョア階級の自由主義的支配層は、民族的反ユダヤ主義の最初の胎動以来、〈カジノ〉〈ドイツ人クラブ〉〈ドイツ学生弁論・図書室〉などのドイツ人組織での、ほんの僅かな反ユダヤ主義の動きも一貫して抑えていた。そして事実、ドイツ支配階級は1914年までは、ドイツ系ベーメン地域からプラハに流入してくる、民族主義的大学生の囲りに、一種の社会的防疫帯を巡らすことに成功していた。彼らはまた、プラハにおけるドイツ語を使用する小市民階級という消滅寸前の少数派、この民族的な余計者たちに対しても同じ措置を講ずることに成功した。1883年から1924年にかけて、プラハにおけるドイツ側の公的生活に参加するユダヤ人の数は順調に増加したが、このことはユダヤ人たちが——むろん経済的に十分に上昇を遂げた場合に限り——ドイツ人支配階層に受け入れられるためには、何ら特別な難関を乗り越える必要がなかった、という事実を明白に示している⁽³²⁾。それにも拘わらず、このようなプラハ独自の状況は、〈ドイツ系オーストリア〉の中ではひとつの例外であったことははっきりしている。大学における汎ドイツ主義学生の例をみれば、反ユダヤ主義の強い伝染力を見て取るのは難しくない。

「しかし数年たてば、これらの学生たちは教師、教授、役人、ジャーナリスト、医者、弁護士などになるだろう。つまり国民の間で枢要な地位に就くわけだ。(……)そして彼らは、彼らの思想を更に若者たちに伝えるだろう。その時はじめて、反ユダヤ主義はあらゆる地域に、あらゆる階層に浸透するだろう。そうなれば反ユダヤ主義は最高潮に達する。そして我々は、ゲッターに閉じ込められていた時代に逆戻りするよう強要されるかもしれない」⁽³³⁾

1891年以来、民族主義的反ユダヤ主義は、プラハの出版界と結びついて現われていた。体育教師アントン・キースリッヒは、民衆的・反資本主義

的な『ドイツ人民の使者』を発行して、その第1号でただちに、「例えばロシアの例にならう、ユダヤ人に対する特別立法」⁽³⁴⁾を要求した。この新聞の主な読者となったのは、19世紀半ば以来、プラハでチェコ化の波に抵抗してきたドイツ語を使用する少数の下層階級であった。

ドイツ系ベーメンの政治的エリートである自由主義的政党は、プラハ以外の地では、民主化のもたらした影の部分に対しては無力さを露呈した。ドイツ自由主義に対する一部のベーメン・ユダヤ人の〈裏切り〉——ドイツ人政党指導者たちはそう呼んだ——以来、はっきりとユダヤに肩入れするというそれまでの風潮は消えてしまった。この年以降、ドイツ自由主義は、19世紀半ば以来チェコ諸政党が、チェコ特有の社会構造のせいでは置かれていたのと同じ状況下に置かれることになった。即ち、ドイツ自由主義は小市民的な大衆層に支持基盤を求めようになったのである。というのも、1882年の選挙法改正によって、それまで政治的に未熟と考えられていた大量の選挙民が政治に参加するようになったからである。ウィーンの反ユダヤ主義の眼を見張るような勢いは、時代の行先を暗示していた。そして、1880年代半ばに、更に社会民主主義が強力な新勢力として登場した時、ブルジョア的自由主義にとっての選択ははっきりしていた。つまり、小市民的急進主義と社会革命の間で押しつぶされてしまわないよう行動すること、即ち、今や重荷となった政治的パートナーへの肩入れを最少限に留めることである。実際、1880年代から第1次世界大戦に至るまで、ドイツ自由主義は反ユダヤ主義に対して痛ましい屈服を重ね続けた。以下の自由主義者の演説からも、自己の政治的原理からの撤退を糊塗しようとする態度が読み取れよう。

「キリスト教徒であれユダヤ教徒であれ、ここに集まっている私たちのうち、程度の差こそあれ、これまでに一度も、一部のユダヤ人に対する憤懣を感じなかったような人が一人でもいるのでしょうか。ユダヤ精神には財産と権勢への飽くことのない欲望が、そしてその時々支配者に迎合する日和見主義がつきまっています。(……) 我国に住んでいるそれ以外の民族と比べると、ユダヤ人の場合、そのような傾向がはるかに顕著にみられるのです。多くの不潔な連中が証券取引所や新聞の編集室へ

と赴くのは、他人の損失から利益を引き出そうという魂胆からなので
 す。こういう現状をみては、国民の間に憤怒の声が湧き起こるのも、ま
 ことに当然といわねばなりません。私たちはこうした怒りを政治的に利
 用すべきではないでしょうか。一部の者が悪いことをしているのですか
 ら、私たちは他の人々をも拒否すべきなのではないでしょうか。(……)
 オーストリアのドイツ人、この言語的にも混合している国、オーストリ
 アにいる私たちドイツ人は、自分の先祖探しをする贅沢が許されるほ
 ど、オーストリアに確実に根を張っているのでしょうか」

良いユダヤ人と悪いユダヤ人という問題の多い区別、そこから生ずる厚
 顔な利益優先主義の表明、更には個人的道徳と政治的道徳を区別するとい
 う侮辱的な提案がなされる。「個人的なつきあいの範囲では、各人が各人の
 好みに応じて好みの人とつきあいがよい。しかし、法律の制定に関与して
 いる人は、反感や共感に左右されるようであってはなりません」⁽³⁵⁾。

自由主義に保護を求めたユダヤ人はすべてを甘受し、修練の末に、自己
 否定、自己偽瞞、〈虚偽意識〉の高度な能力を身につけた。人種論の
 〈指導者〉^{フューラー} シェーネラーの信奉者たちが、「生粋のゲルマン人、レーヴィ・
 シュピッツとコーン」(これらは典型的なユダヤ人名である——訳者注)を笑いも
 のにした(これは1883年のことだった)後もなおしばらくの間、更に、ド
 イツ国粹主義の体操団体が、ドイツ人は自分の服に付着した草の種を振り
 落すように、ユダヤ人を振り落さねばならないと宣伝した後もなお、プラ
 ハヤズデーデン地方のドイツ系ユダヤ人たちは、「我々はドイツ人であり
 つづける。それ以外のものには成れないから」というモットーの下に、ド
 イツ人組織の主たる資金提供者であった。こうした状況はユダヤ人の自己
 理解に対して重大な帰結をもたらした。即ち、そのひとつとして、周囲世
 界の圧迫に屈してチェコ化せざるをえなかった比較的貧困なユダヤ人たち
 に対する憎悪が生じたのである。これら貧しいユダヤ人たちは、ドイツ人
 意識を持つその他のユダヤ人の面目を失墜させ、彼らのドイツ性に不信の
 眼を向けさせたからである。更に、ドイツ系ベーメン諸都市の、ますます
 閉鎖性を強めつつあったユダヤ人社会は、おのれのドイツ性を意識せんが
 ために、模範的キリスト教徒たちを呼び寄せた。更にまた、純粋にユダヤ

的なのに、ユダヤ人という言葉を決して使用しないドイツ系政治団体も生まれた⁽³⁶⁾。

こうした事態は、産業化と経済恐慌の結果おこった急速な人口移動に起因している。1890年には、ベーメンの全人口の約半分が、もはや自分たちの故郷の地に住んでいなかった⁽³⁷⁾。人口移動はますます多くの不安定、不安、政治的・社会的騒擾を惹き起こした。ドイツ人とチェコ人が抗争しあう政治的風土が今やここに形成された。ドイツ人とチェコ人は、社会ダーウィン主義の妄想に囚われ、ベーメンの人口動態に眼を奪われ⁽³⁸⁾、言語境界と学校統計のほんの僅かな変化にも、それを「無言の民族闘争」の戦場と見做してヒステリックに騒ぎ立て、お互いに相手を母語の略奪者として批難しあった。ベーメン社会における最も移動性の高い集団は依然としてユダヤ人であった。ユダヤ人たちは、チェコ語地域に住んでいた時には、チェコ民族主義者の雄叫びに唱和していたのに、ドイツ系ベーメン地域に移ってくるや、今度は彼らがチェコに同調していたことをおくびにも出さない——チェコ人たちはこのことを見逃さなかった。ドイツ系ベーメンの〈リベラルな〉政治家たちもまたユダヤ人を露骨に脅迫した。ユダヤ人たちは「何百年来の伝統を中断してしまうのが得策なのかどうかよく考えてみる必要がある。ユダヤ人は日和見主義者であり、利益しだいで、ある時はこちらに、ある時はあちら側につけばいいのだ、という考え方は間違っていることがはっきりするだろう。(……)言葉の上でチェコ人と親しくつきあっているユダヤ人たちは、ドイツ人からは、言葉の点だけでなくあらゆる点において、チェコ人と見做されるのを覚悟しておかねばならない。彼らは、それまでの彼らの態度を信用して与えられていたところの縁故や利益を、今後も保持し続けられると期待してはならない。彼らは選ばねばならない。しかもこの選択は、断固たる、最終的な決断でなければならない」⁽³⁸⁾、と統計学者ラウフベルクは彼の定評ある著作『ベーメンにおける国民財産』の中で述べている。そして、常に反資本主義的な姿勢を取るドイツ民族主義者たちは、移住者たちを「スラブ人の尖兵」と呼び、また、住民移動によってドイツ語圏を意のままに支配しようと企むチェコ化促進団体の手先であると批難した。彼らの言い分によれば、「ユダヤ資本が産業に投資される場合、毎度のことながら、チェコ人もしくはユダヤ人の経営者

は、仕事を探しているドイツ人は雇わず、チェコ人プロレタリアートを雇用しようとする」という。(1891年『ドイツ人民の使者』紙に掲載された、ライトメリッツ——カフカの伯父がここで商売を営んでいた——からの通信員の記事より)⁽⁴⁰⁾。

かくて、チェコ人とユダヤ人による資本主義的陰謀に対して、つまり、比較的安いチェコ人労働力を使うことで賃金の切り下げをはかり、ベーメンのドイツ人労働者階級を計画的に窮乏に陥し入れようとする陰謀に対して戦うべきだ、という考えが生まれた。こうした考え方に基づいて、1900年以降、様々な民族主義的労働団体が結成されたが、これらの団体はいわば、ブルジョア的反ユダヤ主義のプロレタリア的歩兵部隊であり、むろん最初のうちは、既に早くから地位を確立していた社会民主主義に対抗するだけの力量はなかった。しかしともあれ、こうして民族社会主義的な政党の結成に向けての種子は播かれたのである。

1890年代におけるドイツ人とチェコ人の国粹主義は、単なる政治思想以上のものであった。それは、万人によって聖なるものと感受された一種の宗教的代用品であり、民族帰属の純粹性に反する罪は、極めて厳しい道徳的尺度によって裁かれた。それはまるで、非ユダヤ人社会が、自分たちの抱くすべての罪意識をユダヤ人の上に投影し、民族的日和見主義、虚偽、裏切りの罪をすべてユダヤ人に押しつけたかの感がある。なぜなら、民族帰属の上での変更、意識の動揺は、チェコ人の場合にもドイツ人の場合にも、同様に見い出されるからである。チェコ人たちは子供を、ユダヤ人がそうしたように、ドイツ系小学校に通わせたし、ヴィーンに出たチェコ人は毎年、何千人となくドイツ化していた。また逆に、成長途上のチェコ経済と文化は、野心のあるベーメン・ドイツ人に魅力的な栄達の機会を与えた。しかし、こうした集团的・民族的不道徳の犠牲となったユダヤ人は、永久に偽装を続けることを強いられた。移住してくるユダヤ人、社会的に上昇してゆくユダヤ人は至る所で周囲の猜疑心に晒された。宗教的共同体を最終的に離脱してしまったユダヤ人は最も疑い深い眼で見られた。民族的人種主義の妄想が彼らを待ち伏せていた。1895年、北ベーメンにあるパンフレットが出回ったが、そこに載っている詩は社会心理学的に興味深い内容を含んでいる。「しかし、やつらは変装し、忍び足でやって来る／髪の

色も褪色していたり、ブロンドになっていることがある／だから隣人をも猜疑の眼で見るとようになってしまう／我々はお互いに心の中でつぶやく／こいつはユダヤ人なのか、それともそうではないのか」⁽⁴¹⁾。

1880年から1890年にかけての10年間に、社会的統一体としてのベーメン・ユダヤ人の政治的団結の最後の残滓も、国粹主義的な煽動活動の爽撃をうけて粉碎された。それと共に、集団としての自尊心も失なわれた。1889年、プラハのユダヤ人『教区新聞』は「ユダヤ人内部での、まことに悲しむべき、しかし紛れもない反ユダヤ主義」⁽⁴²⁾の風潮を嘆いている。1897年、体育教師キースリッヒは、汎ドイツ主義的な『ドイツ人民の使者』紙上で、ある過激な選挙集会のことを誇らしげに報告している。いわく、「反ユダヤ主義の本質と活動についての適切な説明は、そこに居合わせた5人のユダヤ人によってさえも正しいと認められ、反対をうけなかった」⁽⁴³⁾。この集会の参加者のうち何名が、1883年以来、日常化していた暴力行為に参加していたのかどうかはわからない。ともあれ、プラハにあるベーメン警察本部の1880～1890年代の資料は、街頭での暴力行為、飲食店での煽動集会、脅迫文書の配布、爆弾テロ（特に多し）、プラカード、脅迫、罵倒、窓への投石（日常的・古典的方法）、路上での叫喚、ユダヤ人虐待、ユダヤ人家屋へのペンキ塗付、などに関する調査文書で満ちている。1890年代末には、ユダヤ人を槍玉にあげる必要が以前よりも増していたと思われる。というのも、この頃、オーストリアの経済危機は更に深刻になっていたから。そして、それを最初に感じ取ったのはベーメン・ユダヤ人たちだった。

何が起こったのか？ この頃オーストリアでは選挙法の民主化を求める広範な運動が盛り上っていた。1883年の場合と同様、再びブルジョア政党が脅威に晒された。青年チェコ党は1890年代に既に、ある有力な農民政党の離脱を甘受せねばならなかった。しかし、1897年に初めて発効した普通選挙法の実施——得票数の操作によってなお歪みをうけていたが——と共に、ブルジョア的・チェコ民族主義も危機に晒され、その結果、革命的かつ親オーストリア的な傾向をもつ、超民族的な社会民主主義に対する政治的影響力を失うに至った。一方、青年チェコ党は1891年以来、ヴィーンの国会で議席を占めていた。それゆえ彼らは、ヴィーンのキリスト教的・社

会主義的・反ユダヤ主義的「愚者の社会主義」の大衆運動をじっくり研究することができた。青年チェコ党の機関紙『国民新聞』(Národní listy)の編集者であった煽動家ヴァーツラフ・クロファーチは、ヴィーンでのこうした見聞をプラハにも適用しようとした。彼は自分は表面に出ず、背後で糸を操ることによって、1897年4月、プラハの小規模商工業者や労働者階級の中に、一連の国粹主義的団体を作りあげた⁽⁴⁴⁾。この新しい〈民族社会主義〉労働者運動の中核を形成したのは手袋製造業の労働者だった。彼らの大部分は、この頃プラハとトゥシュカウに工場を有しオーストリア帝国最大の企業のひとつだったヴェルフエル(作家F・ヴェルフエルの父、ルドルフ・ヴェルフエルを指すと思われる——訳者注)の工場の労働者だったと思われる。ツェルトナー小路のカフカ家のごく近く、リング通りの旧市庁舎前広場で、1897年4月4日、新しい運動の大々的なデモがプラハで初めて行なわれた。クロファーチは前代未聞の過激な反ユダヤ主義的な煽動演説をぶち、青年チェコ党の政治家たちはそれを支持し、600名の労働者たちが熱狂的な拍手を送った。民族社会主義の綱領は、ドイツ人とユダヤ人をチェコ人の搾取者と見做すもので、従来からのステロ版の焼き直しであった。即ち、チェコ解放への道は、彼らに対する全面的ボイコットにある、というものである。この運動の中核として活動したのは、1897年に結成された闘争的団体《民族防衛》であり、クロファーチ、バクサ、そして青年チェコ党の悪辣な反ユダヤ主義者ブジェズノフスキーがこの団体を牛耳っていた⁽⁴⁵⁾。1897年春の国会選挙で、青年チェコ党が、よりによってこのブジェズノフスキーをプラハ選出の候補者に指名した時、チェコ・ユダヤ人と青年チェコ党の間で最初の衝突が起った。プラハ・ユダヤ人に対する猛烈な中傷は——彼らの半数は既にチェコ化しているにも拘わらず、彼らは批難されたのだ——、彼らの政治的意志形成を行なう上で、かえってカタルシスのように作用した。つまり、プラハ・ユダヤ人たちは選挙戦において、自分たちの民族としての自己認識とは無関係に、戦略的に一致団結して、社会民主主義に投票しようとしたのである。ブルジョア的民族主義からの離反が始まっていた。1900年頃のユダヤ人は、社会学的にみれば極めてはっきりしたブルジョア的中産階級を形成していたのだが、こうした階級が、いかに社会民主党がリベラルな法治国家擁護を唱えていたオーストリ

ア最後の政党だったという理由からとはいえ、今や社会革命を原理とするような政党に接近するという事態は、ユダヤ人の政治的孤立化をはっきりと物語る証左に他ならなかった。彼らの孤立化は、ドイツ系ベーメン地域でも同様に進行していた。1897年、ユダヤ人の選挙運動組織者は、ユダヤ人が政治的には最少限の要求にまで退却したことについて、次のように述べた、「社会民主主義の経済政策について論ずることは差し当りやめておく。しかし、真の自由主義者ならば社会民主主義の政治綱領に同意するだろう。おまけに、私の敵の敵は味方だ、ということもある」⁽⁴⁶⁾。ユダヤ人の社会民主党への加担は、チェコ及びドイツ市民階級をただちに活発な報復活動へと駆り立てた。1897年5月17日、青年チェコ党の党首エドアルト・グレーグルは選挙結果から、次のような結論を引き出した。

「私はユダヤ人のことをとやかく言うつもりはない。ただ私は、こういう結果になって良かったということ(……)、遂にわがチェコ民族の眼が開いてかえって良かったのだ、とだけ言っておきたい。私はかつて一度も反ユダヤ主義者だったことはない。ヒューマニズムの立場からしても、私はそうしたくなかった。しかし、ここ数日、我々は苦い経験を嘗めたからには、今日という日を境に、全プラハは反ユダヤ的とならざるをえないのだ。(そうだ! 嵐のような拍手)。自分たちに対してこのような振舞いに及んだ者たちに対して、チェコ民族が今後どのようにして借りを返すべきか、についても我々はよく承知している」⁽⁴⁷⁾

ドイツ系ベーメン地域では民族主義者たちが凱歌をあげた。「リベラルなキリスト教徒たちの多くは出て行った。今や我々には、自宅の奥まった一室でこっそりとつぶやくのではなく、戸外でおおっぴらに〈ユダ公〉と言っても何はばかる必要もないのだ」⁽⁴⁸⁾。ドイツ民族主義の国会議員バロイターは言った、「ユダヤ人が社会民主主義に魅力を感じているのは、私から見れば何ら不思議なことではない。彼らは大衆に惹きつけられるのだ。根なし草の破壊的な精神が彼らの気質に合うのだ」⁽⁴⁹⁾。

1897年春の前哨戦は、間もなくより大規模な形でその意味を明らかにするに至る。1897年秋、青年チェコ党と共同して支配を続けようとしていた

バデーニ政府は、アルプス地方、ヴィーン、ドイツ系ベーマン地域に起ったドイツ民族主義諸勢力による激しい大衆的反政府デモによって倒れた^(訳注七)。「ドイツ系ベーマン地方がかつて知らなかったような民族的情熱の嵐が、国中を吹き荒れた。バデーニ打倒の戦いが、反自由主義の——それはまた同時に反ユダヤ主義でもある——大波をベーマン全土に運んだ。民衆は大挙して、ドイツ民族主義のスローガンを掲げる、汎ドイツ主義の旗印の下に参集した」⁽⁵⁰⁾。ドイツ系ベーマン地域では、チェコ人少数派に対する迫害も行なわれたが、これに対するプラハの反応は素早かった。1897年12月初頭、プラハにおいてあの有名な、悪名高い《12月暴動》が勃発した。それはドイツ系機関への攻撃から始まったが、まもなく反ユダヤ・テロへと矛先を転じ、特に、既にはっきりとチェコへの同化を遂げた者として振舞っていた、郊外に住む少数のユダヤ人が標的にされた。「我々のチェコ人意識は我々を護ってくれなかった、そうだ、三色旗(チェコの国旗——訳者注)さえも助けにはならなかった。我々の誰かが三色旗を持っていると、〈あいつは恐いんだな、よし、待ってろ、あいつに一発お見舞いしてやるぞ〉と言われたし、三色旗を持っていないと、同じく暴行を加えられた」とチェコ系ユダヤ人たちは嘆いた⁽⁵¹⁾。クロファーチの取巻きグループがこの暴動の火付け役だったと思われる。エゴン・エルヴィン・キッシュ(キッシュは1885年、プラハでドイツ系ユダヤ人織物商の家に生まれた——訳者注)は、1897年という〈激動の年〉を、ユダヤ人として経験したが、その時の「プラハ街頭に吹きすさぶ憎悪の嵐」を次のように後に記した。「私は、狩り立てられ、暴行され、自宅に居ても街頭の狂気に脅えなければならない者たちの側に属していた。私は、家々が略奪され、破壊されるのを見た。打ち破られた店の扉や、粉々になったガラス窓から、チェコ人が手にした燈火が外に漏れ出すのを私は見た。至る所でこういう有様だった。すると突然、人でいっぱい、喚声と騒音に満ちた通りを、騎兵隊の蹄の音が響いてくる。突撃ラッパが吹き鳴らされ、隊伍を組んだサーベルと銃剣がガス燈の明りの中できらめく……」⁽⁵²⁾。数日間の逡巡の後——その間にプラハに無政府状態が横行し始めた——、オーストリア政府はプラハに戒厳令を布いた。プラハの実力者たる青年チェコ党の政治家たちは、こうした暴動を意地悪な眼付きで傍観していた。ただ社会民主党のみが、ほとんど効果を挙

げなかったものの、テロ鎮圧のための組織を動員した。数多くのユダヤ人の生活が破壊され、何千枚というガラス窓が破られた——その中にはマックス・ブロートの家の窓ガラスも含まれていた。プラハ・ユダヤ人共同体抗議団は、新たに就任したオーストリア首相ガウチュに対して、苦々しい皮肉を込めてこう述べた、「暴動を背後で操った指導者たちに対して、彼らが殺人や放火ではなく、略奪だけを計画したことに、我々は感謝しなければならないところでしょう。もし殺人や放火が計画されていたら、略奪の場合と同様に実行され、同様に際限のない犠牲をもたらしたでしょうから」と。通行人たちが略奪者たちを、「カフカは放っておけ、あいつはチェコ人だ」と言って制止したというのは、この時のことだったろうか。この件については、資料の上では何もはっきりしたことは言えない。あるいは、カフカ『観察』中の次の箇所などが、《12月暴動》の記憶を踏まえているのかもしれない。

「見すばらしい男を追いかけよ、そしてその男を門道の中へ突きとばし、持物を奪い、両手をポケットに突っ込んで、その男がうちしおれて左の路地に折れてゆくのを見送れ。馬に乗ってばらばらに駆けて来る警官が馬を御し、お前たちを追い駆ける。彼らのしたいようにさせておけ。空っぽの路地を見て彼らは悲しくなるだろう。私にはそれがわかっている。見てごらん。彼らはもう2人ずつ馬を並べて去ってゆく。街角はゆっくりと、広場は飛ぶように」(カフカ『観察』中の小品《商人》より)

17歳のギムナジウムの生徒だったカフカは、多分この事件を経験していた。この頃、カフカは社会民主主義に接近していた。しかし、これはそれほど奇妙な態度とはいえない。社会民主主義は、4月の選挙の際にユダヤ人市民階級から寄せられた信頼に、12月には十分に応えた。「現在、ユダヤ人を苦しめている野蛮な知識人たちは、素朴ではあるがしかし誠実な労働者たちに道をゆずるべきだ」⁽⁵⁵⁾とプラハ・ユダヤ教区新聞は1897年に述べている。ユダヤ人市民階級の子弟たちを駆りたてたのは、単なる選挙戦術以上のものであった。つまり、彼らは、共同体への憧憬、安全への願望とでも呼びうるような、漠然とした動機に基づいて行動したのである。こ

の場合、父親たちの成り上り者根性——父親たちがこうなった理由は息子たちは知らなかった——に対する息子たちの良心の疚しさこそ、「独占資本家階級から、プロレタリアートの陣営へのユダヤ人脱走者」⁽⁵⁶⁾が出た理由だった。フランツ・カフカは『父への手紙』の中で、「身分の低い人たち」との連帯感について語っている。子供時代のカフカは、父の「圧制」と「経営者根性」に痛めつけられた結果、こうした下層の人々との連帯を目指したのだった。

「それゆえ、必然的に私は従業員たちの側につくことになりました。私は、あなたが他人をどうしてあのようにひどく罵倒することが出来るのか理解できず不安でしたし、私が見るところ、ひどく腹を立てている従業員たちを——私自身の安全を守るという理由からも——あなたや私の家族と仲直りさせたいと、不安に駆られつつ望んでいたという理由からも、そうしたのです。そのためには、従業員に対するありきたりの行儀の良い態度だけではだめでした。謙虚な態度でも不十分でした。むしろ私は、へり下っていなければならなかったのです。(……)そして、取るに足りない人間である私が、跪いて彼らの足を嘗めたとしても、支配者であるあなたが、上の方で怒鳴りつけていらっしゃるのだから、私がそんなことをしたところで、相変らず何の償いにもならなかったことでしょう」(カフカ『父への手紙』)

カフカが『父への手紙』の別の箇所で言及している、妹オトラの好み、つまり「貧しい人々との交際、あなたの気分を悪くさせる女中やその類の連中とのつきあい」も同じようにして理解できよう。他の若いユダヤ人たちもまた《民衆》を求めていた。多くの場合、しかしそれは下層階級の人々をセンチメンタルに称えるだけに終わったのだが。百万長者の息子フランツ・ヴェルフェルは《老僕たち》を称える詩を書いた。「奉公は聖なる仕事、ああ、決して尽きることのない奉公の仕事よ／何も知ろうとせず、何も貪らない彼らの素朴さよ！／夜は、テーブルを照らす火影の中に疲れた体をかがめ／仕えるとは、称むべき生き方！酷使された両手で／地上ではおのれを消し去り、天上でおのれを成就させるのだ！」⁽⁵⁷⁾。民族主義者のよ

うに民衆的・反資本主義的な立場に立つが、むろんのこと民族主義者のグループには受け入れられなかった若者たちもいた。1896年以降、こうした若者たちの中でひとつのサークルが結成された。このサークルは《プラハ・ドイツ労働者協会》と名乗ったが、その中心をなしたのは、プラハの富裕なユダヤ人ブルジョア家庭の子弟たちであり、そのメンバーもほとんどユダヤ人学生であった。これらの学生たちは、「プラハではもう自由主義は流行遅れだし、学生の多くは信仰上、ドイツ民族主義に共感することはできない」⁽⁵⁸⁾ という理由から、社会主義を組織の看板にしていた。むろん、プラハでドイツ人労働者を探すことは最初から見込みのない企てであり、この協会は1898年に解散した。確信的なユダヤ人社会主義者は、彼らがプラハに留まり続ける限り、プラハ社会民主党に加入した。ギムナジウム時代のカフカの友人で、若い頃は社会主義者のシンパであったルドルフ・イロヴィもまたこの道を辿り、後に社会民主党機関紙『民衆の権利』の編集者となった⁽⁵⁹⁾。ギムナジウム時代のカフカは、赤いカーネーションをボタン穴に挿し（社会主義を信奉する意志表示——訳者注）、上級生となってからも、ドイツ系ユダヤ人の間でも歌うのが恒例になっていた《ラインの護り》（M・シュネッケンブルガーが1840年に作詞したドイツ愛国歌——訳者注）と一緒に歌うのを拒んだ⁽⁶⁰⁾。しかしカフカは、ユダヤ人社会から自覚的に脱け出して組織的な政党活動に従事するという、ユダヤ人社会主義者に典型的な道は進まなかった。社会主義運動の実情に対する、反発と混じりあった中立的な共感をこめて、カフカはブルジョア生活の温室の中から外界を覗いていた。1903年、彼は友人オスカー・ポラックに宛てて次のように書いている。

「今日は日曜日だ。それでいつものように、商店の従業員たちがヴェンツェル広場をグラーベン通りの方へ下って来て、日曜休業を要求して叫ぶ。僕が思うに、彼らが胸に挿した赤いカーネーション、彼らの愚かしげなユダヤ面、彼らの叫び声は何かしら非常に意味深いものだ。（……）しかし他の連中は、グラーベン通りをただ散歩し、しかも自分たちの日曜日の使い方がわからないものだから、ニヤニヤ笑っている。こうした連中の頬をぼくはぶん殴ってやりたい。ただし、僕にそうする勇気があ

れば、しかも、僕自身がニヤついていなければの話しだが」(カフカ『書簡集』)

ところで、ユダヤ人の社会民主党加入の増加には、社会民主党の側からすれば、問題点も含まれていた。つまり、ユダヤ人加入の結果、オーストリア社会民主党の指導部にはユダヤ的色彩が濃厚となり、社会民主党は窮地に立たされたのである。ベーマンの民族主義者とキリスト教社会主義者の側からの宣伝は、彼らにとっての危険な政敵・社会民主党を「ユダヤ人政党」と繰り返し中傷し続けた。例えば、ベーマン・キリスト教社会主義党の機関紙『ヴァニスドルフ家庭新聞』は1898年、社会民主党によって大々的に企てられた1848年革命50周年記念行事を次のように中傷した。「(1848年革命は)東洋風のペテン、ニンニク臭い詐欺である。1848年以降の時代がもたらしたのは、キリスト教徒がユダヤ人に欺かれた、という事態だ。そのために大衆的貧困がますます進行した。至る所で忙がしげに活動しているユダヤ人たちが準備している、社会主義の未来とやらもまた、こうした事態をもたらすだけのことだろう。社会民主主義の指導者たちにとっては、労働者階級や貧民は、いくらでも手にはいる砲弾の餌食にすぎないのだ!」⁽⁶¹⁾。こういう状況下では、社会民主党としては、党が法治国家の擁護という立場を逸脱して、特別の「ユダヤ人擁護団体」と見られるのは、極力避ける必要があった。とはいえ実際には、1897年以降の、オーストリアの慢性的国家危機の時代にあっては、党はしばしばユダヤ人擁護の立場に回らざるをえなかったのだが。さて今やベーマン全土で、ユダヤ人の民族的帰属の問題とは関りなしに、際限のない反ユダヤ旋風が吹き荒れていたが、その頂点となったのは〈ヒルスナー事件〉であった。この事件では、ユダヤ人迫害が一種の病的な妄想体系へと亢進して行った。

1899年4月1日、復活祭の前日、ポルナからクライン・ヴィーツニッツ村に通ずる街道わきに、日雇い労働者の娘で19歳になるアグネス・フルツァが、首を大きく斬られた死体で発見された。1883年にティスチャ・エスチュラルであったのと同じような、犯人も殺害の動機も不明の少女殺害事件がまたしても起ったのだ。しかも今度の事件は、遠く離れたハンガリーの村で起ったのではなく、過激な新聞に煽られたチェコ急進主義が、

ヴィーンでの青年チェコ党勢力の後退からの活路を求めていたベーメンの真中で起こったのである。チェコの小さな反ユダヤ新聞のプラハ編集長ヤロミール・フシクは——彼もまた《民族防衛》の設立者の一人である——検事の役目を自ら買って出て、ヴィーンのキリスト教社会主義の政治家シュナイダーに、ポルナで起ったこの事件に注意を向けさせ、ユダヤ人の靴職人レオポルト・ヒルスナーが犯人であるという示唆を与えた。オーストリアの地方と中央における反ユダヤ主義共同戦線が形成されたこの時期以降、この事件と裁判の経過は、あらゆる制度上の制限や法治国家としての歯止めを越え、ユダヤ人全体に対する一種の集団心理に基づく裁判劇と化したのであり、結局のところ、最初から決っていた有罪宣告をもって終るしかなかった。そもそも正式な裁判機構が動き始める前に、ポルナの反ユダヤ主義新聞の幹部が一種の人民裁判所を設け、ここは地方裁判所よりも優先すると自ら宣言し、記録や調書を作成し、最初の証人尋問を行った。1895年春の最初の新聞報道の直後から、雪崩をうったように煽動活動が燃えさかった。そして、ヴィーンの反ユダヤ新聞がまだ慎重な、もって回った神秘的な言い回しで仄めかしていた時、青年チェコ党の大衆新聞は、はるかに露骨に、この事件がユダヤ人による儀式殺人であることを指摘した。チェコの宗教新聞は間もなく、「頸部切断の方法」、もしくは犠牲者の「清浄化」といった細部にわたって報道し始めた。(ユダヤ教の戒律が、清浄な動物を、定められた規定に従って屠殺してはじめてこれを清浄食品として摂取してよいと定めていることをあてつけている——訳者注) こうした「学問的」議論の結果、大量の儀式殺人文献が生み出され、儀式殺人はベーメン中の多くのジオラマ、覗き絡繰り箱の呼び物となった。

「こうした絵に表現された光景は本当に恐ろしいもので、いやらしい光景は記憶にこびりついて消えようとしなかった。田舎の民衆の大多数にとって、印刷されたものはそれだけで一定の権威を持っていたこと、そしてこの権威は、パンフレットの場合は特に、極めて巧妙に書かれたテキストによって一層高められたことを考慮するなら、あのような光景や、理性を呪縛する際物が、いかに絶大な暗示効果を発輝したか推測することができよう。」⁽⁶³⁾

この事件を分析した犯罪心理学者アルトゥール・ヌスバウムは以上のように記している。ウィーンの過激な反ユダヤ主義によって作り出されるあらゆる不合理な虚偽が、青年チェコ派の『国民新聞』やチェコの宗教新聞紙上に、神聖な真理として掲載された。血の証告は反ユダヤ煽動のまたとない手段であることが明らかになった。というのも、「ユダヤ人は宗教的理由から殺人を犯すという噂、彼らは罪のない子供、少年や少女を彼らのいかがわしい宗教的狂信の犠牲者として探し求めているという風評——こうした観念は信心深い大衆を心底から不安に陥し入れたので、邪悪な犯罪者たちを撲滅することは、神の求める神聖な行為であると思込ませる結果となった」⁽⁶⁴⁾ からである。かくてこの裁判は一種の「人民裁判」となり、司法は単に処罰の問題に関っただけであった。この事件が起こる直前、フランスのレンヌでドレフェス^(訳注)が有罪とされ、これをチェコ民族主義派の報道機関は歓呼して迎えていた。それ故、クッテンベルクの検事が、ヒルスナー事件を最初からベーメンのドレフェス事件と呼んだのは何ら異とするに足りない。ヒルスナー事件の審理方法について、偉大な刑法学者フランツ・フォン・リスツは「暗示の力」が猛威をふるったのが19世紀後半を通しての特徴であると後に語り、更に次のように記している。「民間に流布している俗信に基づいて証言者の想像的イメージが形成され、こうしたイメージがますます堅固な形態を取って具体性を帯び、特色ある豊富な細部を造り上げた。数ヶ月も経ってから新しい証人たちが現われ、宣誓した上で、不可解にも、それまで秘密にしていたという決定的な事実を証言した。かくて、被疑者の上に投げかけられていた綱の目は、ますます狭まっていった」⁽⁶⁵⁾。カレル・バクサは、被害者の家族が努めた付帯告訴人の代表として、聖なる復讐者の役割を引き受けた。彼は暴行、凌辱、殺害のモチーフを彼の論述にたっぷり編り込むことによって、品行方正を装いながらその裏で猥褻を好む、当時の風潮に巧みに訴えかけた。

「私は傷についてとやかく描写することはしない。起こったことの総ては、単に命を奪うこととは異なる、何か全く別の目論みがあったことを暗示しているからだ。その場の状況を想像してみよう。少女は帰宅の途中である。彼女は既に家庭へと思いを馳せている。彼女は何ら不吉なこと

は予感していない。自分が狙われているなどとはこれぼっちも思っていない。すると突然、彼女は気絶させられ、数人の男の手に委ねられる。男たちは少女の衣服を脱がし始める。そのやり方が暴力的なために彼女は意識を取り戻す。純潔な若い娘がここで置かれた状況を想像していただきたい。男たちが彼女の体から衣服を剥ぎ取り、明らかに彼女とは異なる、いやらしい人種に属する見知らぬ男たちが、犠牲の小羊に襲いかかるように、自分に襲いかかるのに彼女は耐えねばならない。男たちが彼女の胸をはだけた時、そしてこれが何如なる目的で行なわれているかに彼女が気付いた時、つまり、次の瞬間には男たちの一人が彼女に穢らわしい行為をしかけ、彼女の純潔な美しさを汚そうとしていることに想倒した時、彼女はいかに大きな苦しみを味わわねばならなかったことか。彼女がこうした思いで恐怖に震えている間にも、男の一人がナイフを取り出す。娘は、まだナイフを調べている殺人者の不潔な手が自分に触れるのを感じず。こうした光景を思い描いてみれば、アグネス・フルツァーが言葉の真の意味で殉教者であったことが納得できよう。何のためにこんなことが行なわれたのか? (……) それが明らかにされたのは幸いであった。彼らはキリスト教徒を殺害しようとしたのだ。無垢な少女を殺して彼女の血液を採ろうとしたのだ。どんな言い逃れも無効である。殺人の目的は明白だ。血を奪うために、隣人の命を狙っている人々が存在するという情報は、世間に広く知れ渡っている。何と浅ましく、恐ろしいことだろう! そんなことはとても信じられない、と人は言うだろう。しかし、我々は証明され、反証を許さぬ事実の前に立たされているのだ。この殺人の真の目的については私は何も語るができない。私はそれについては何も知らないのだ。なぜ彼らが血を集めるのか、なぜそのようなことが行なわれるのか、その理由を調査し解明することは、国家社会で枢要な地位に就いている人にすべてに課された義務である」⁽⁶⁶⁾。

審理を重ねる間に、聴衆は次第に、裁判劇のひとつひとつの場面で、騒々しく、賛成もしくは反対の意志表示をする合唱隊の役割を演ずるようになった。結局、ヒルスナーには死刑判決が下された。過激なチェコ人たちは勝利の凱歌を挙げた。1901年、チェコ出身の過激な国会議員フライス

ルは、オーストリア帝国議会で、なぜヒルスナーはまだ絞首刑にされていないのか、と質問している⁽⁶⁷⁾。

しかし汎ドイツ主義者たちもまたこの裁判を、ユダヤ人に特別法を課すべしという彼らの従来からの要求を実現するチャンスとして歓迎した。ベーマンのドイツ民族主義の理論的機関紙『東部ドイツ新聞』には次のような嘲弄的な記事が載った。

「ドイツ民族はユダヤ人を全体として、人種として考えている。それ故、ユダヤ人内部での個々の善悪とは関りなく、我々はあくまでユダヤ人全体と対決するつもりである。(……) アーリア人世界が、ひとつふたつの儀式殺人以外にユダヤ人を批難する点がないとすれば、ユダヤ人問題も反ユダヤ主義も存在しないだろう」⁽⁶⁸⁾

ベーマンでは、プラハ・チェコ大学の社会学教授トマーシュ・マサリクが^(訳注九)、この政治的ドラマの唯一の局外者として、社会民主主義者たちの慎重な支援の下に、この集団的妄想に対する戦いを企てた。しかしこの試みは成果を挙げなかった。民族主義的な派閥思考が、法治国家の基盤を既に深い処まで浸蝕してしまっていたからである。マサリク (Masaryk) はマツェスリク (Mazsesryk) と呼ばれ^(訳注十)、国粹主義的な世論は、彼はユダヤ人に買収されたのだ、と報じた。1899年、マサリクがプラハ大学の彼の教え子たちから受けた批難は、この間の事情をよく表わしている。学生たちは次のようにマサリクを批難した。「我々がマサリクを批判するのは、一民族が一人の人間のように団結して、敵の政府に立ち向かうのが必要なこの激動期に、彼がたかが一人のユダヤ人のために民族全体を混乱させ、弱体化させようとしているからである。彼はドイツの膨張主義に手を借しているのだ」。世論の圧力は、マサリクの作っていた小さな《現実主義者党》のリベラルなサークルの内部にまで及んできた。1914年になってもマサリクは嫌悪の念をこめて次のように回想している。「私の知人たちの不安そうな顔が思い浮かんでくる。彼らが私を避けたこと、彼らが私に反ユダヤ主義的な宗教観を吹き込もうとしたことを私は思い出す。これは、私の現在の疲労した心を更に重くする記憶だ」⁽⁷⁰⁾。この頃、ギムナジウム最上級生

だったカフカが、ポルナの事件については何か発言しているかどうかについては、何の記録も残っていない。しかし、ここには何か隠されていることが予感できる。ユダヤ教の掟に従った清浄な屠殺に関しては、カフカ家は無縁ではなかった。祖父ヤーコブは〈ショヘート〉(Schochet)、つまり宗教的屠殺者の職に就いていた。1916年、カフカはアーノルト・ツヴァイクの悲劇『ハンガリーの儀式殺人』を読んだ。この作品は、1883年というカフカ誕生の年に起きた、悪質なユダヤ人憎悪の新たな幕開きを告げた、例のティスチア・エスチュラル裁判を扱っていた。この作品の読後、カフカはフリーチェに宛てて、「ある箇所にさしかかると私は読んでいられなくなり、ソファに腰を下して声をあげて泣きました。私はもう何年も泣いたことなどなかったのに。」(『フリーチェへの手紙』)と書いている。カフカ自身も、儀式殺人裁判が中心をなす短編を書いた。それは1911年に、ロシアのオデッサで起きたベイリス裁判を題材にしていたという。ドーラ・ディマンツの証言によれば、1923年、カフカは「亡霊ども」から逃れようとしていた冬のベルリンで、ドーラに命じてこの作品の草稿を焼却させたという⁽⁷¹⁾。

ポルナ事件が惹き起こした感情的なうねりの高まりの中で、民族闘争の初期から繰り返し試みられてきたユダヤ商人に対するボイコット運動は、今や露骨な脅迫にまで昂じた。「ユダヤ人の店では買わない／コーヒーも、砂糖も、家具も／ユダヤ人は我々を殺した／若い娘を」⁽⁷²⁾と子供たちは歌った。(むろんチェコ語で。ドイツ語訳はE・E・キッシュによる)この運動は今やフランティシェク・パラツキーの掲げたスローガンに倣って〈自民族の店で〉運動と称し、すべての経済的分野の民族的統合化を理想として掲げた。1900年以降、毎年何千人というユダヤ人家族が、チェコの田舎地方でのボイコット運動を避けてプラハやヴィーンやドイツ系ベーメン地域に移住した。1900年から1912年にかけて、ベーメン在住のユダヤ人数は9200人から8500人へと減少している⁽⁷³⁾。小都市における小規模なユダヤ人商人の生活は日を追って苦しくなっていた。カフカのある初期作品は『商人』という。

「幾人かの人々が私に同情しているというのは本当かもしれない。しかし、

私はそういう感じを持ったことはない。小さな店の経営で私は頭が一杯だ。心配事のために額や顚が痛くなるが、それで将来の満足が約束されるわけではない。私の店は小さいのだから。(……) さて今、週日の晩、店が閉められ、私が店の絶え間ない用事に追われて働かなくともよい数時間が眼の前に突然現われると、朝方に遙か前方に追い払っていた興奮が、打ち返してくる波のように私に襲いかかり、しかもそれは私の裡に留まらず、どこへともなく私を引き攫ってゆく」(カフカ『観察』中の小品「商人」)

『ある戦いの手記』の次の箇所も、公然たる、あるいは秘かなボイコット運動という暗鬱な世情を背景にしているのかもしれない。

「全般的な景気が非常に悪いので、私は事務所にいて時間が余る時は、自ら見本カバンを手を持って顧客を個人的に訪問してみる。(……) しかし去年は、私には見当もつかない理由から、いくつもの得意先が失なわれてしまった。しかし、こうした障害の本当の理由など、あるはずもないのだ。最近のような不安定な時勢では、ある場合にはひとつの言葉で、またある場合には気分ひとつで決ってしまうのだ。(……) 古くからの友人だってあてにならない」

むろん、総てのユダヤ商人が突如として破産したり、得意先や顧客を失ったわけではない。しかしまさに致命的だったのは、ボイコット運動による脅迫が全般的に広がり、恐怖と不信の空気が蔓延して、経済活動の見通しが不透明になったこと、更に、こうした雰囲気の中にあっては、ユダヤ人商人を経済的舞台から追放しているのが不合理なボイコット運動の風潮なのか、それとも客観的な経済的必然性なのかの見極めがつかない、という点であった。ユダヤ人が〈媒介する異人〉としての古典的経済的機能を演ずる時代は、1900年頃を境に、確実に終りつつあった。経済活動におけるユダヤ人の指定席は、後からやってきた他の連中によって、取って代られるようになった。

「地方の小さな町やその周辺の村では、キリスト教徒の店員たちが自ら経営者となっていた。そのため、人々はもはや地方都市にあるユダヤ人の店に行かなくなった。更に加えて、新興産業は仲介業者に頼らず代理店方式によって製品を販売させるようになった。手工業者と労働者は消費組合を作って提携したし、ユダヤ人の中での競争も激化した。こうしてユダヤ商人の勢力は弱まっていった」⁽⁷⁴⁾

カフカの父ヘルマンが営んでいたような、大手のユダヤ人卸売業も打撃を受けた。カフカの初期作品には、次のように嘆く人物が登場する。

「ねえあなた、あなたも私と同様よく御存知のように、こうした製造業者たちは、どんな地方の田舎町にも人を派遣し、どんなしがない雑貨屋にも渡りをつけるのです。そしてあなた、彼らはこうした雑貨店に対して、私たち卸商人に対するのとは違った値段で品物を提供するのでしょうか？ あなた、このところをよく聞いて下さいよ、それが全く同じ値段なのです。(……) これこそ破廉恥というものです。私たちは圧迫されています。こんな状態では、私たちが商売するのはもう全く不可能です。私たちは圧迫されているのです」(カフカ『田舎の婚礼準備』)

カフカの小品『隣人』は、〈自民族の店で〉運動によって激化した競争を心理的モチーフにしているように思われる。「(……) 私が受話器を置くや否や、あいつはもう私の仕事を妨害しようとして活動し始めているかもしれないのだ。」

儀式殺人ヒステリーが徐々に鎮まり、1910年代の中頃、ユダヤ人が行なうという「絞血、吸血、血のスープ料理」に関する恐怖の報告が次第に少なくなった時もお、商人、医者、弁護士に対するボイコットは後を絶たず、彼らは「まるで敵国に住んでいるかのように」感じていた⁽⁷⁵⁾。カフカの伯父フィリップが商売を行っていたコリーンでは、1908年12月、ある過激なチェコ人女性団体のメンバーたちが、ユダヤ人商店の前に立ち、店にやって来る客を写真に撮ろうとした⁽⁷⁶⁾。ドイツ系ベーメン地域に移住してきた人々の状態は、それ以前より更に悪化した。「光り輝く原始ゲルマン

のクリスマス・ツリーの下に置かれた愛する者への贈り物が、ユダヤ人の店で買われた物だとしたら、それはドイツ人家庭にとって何と恥ずべきことだろう!」⁽⁷⁷⁾と1903年、西ベーメンのボイコットを呼びかけるあるポスターは記している。

「クリスマスの贈り物をチェコ人やユダヤ人の店で買うドイツ人は、自己自身の名誉を傷つけ、自民族を恥かしめている。何と多くのドイツ人職人や商人が、特にユダヤ人との間の競争で圧迫されており、生活防衛のための困難な戦いを強いられていることか。ドイツ人同胞は、しばしば何の気なしに同国人の店の前を素通りし、ユダヤ人の店にはいつてゆくが、ドイツ人はそこではユダヤ人の偽善的な口車に乗せられて、こっぴどく欺かれてしまうのだ」

1909年、エガーでは、クリスマス・シーズンにユダヤ人商店で買物をした客の名前を公に発表する役目を持つ「監視委員会」がつくられた⁽⁷⁸⁾。そしてユダヤ人たちが撤退すると、彼らの不幸を喜ぶ意地の悪い歓声が挙げた。ユダヤ人の大半に退去を命じたポルナ市長の声明を聞いて、多くの人々は「まるで疥癬から解放されたかのような」気分になる。オーストリア刑法第302条によって、社会集団に対する憎悪の煽動は曖昧な形ではあるにしろ、禁止されていたので、ボイコット・キャンペーンのための巧妙な方法が考え出された。例えば、プラハの反ユダヤ主義の指導者ブジェズノフスキーは、議会質問用に用いるという口実で、ボイコット・リストを宣伝しようと画策したが、検察側も議会用であるという理由に妨げられて、このリストを差し抑えることができなかった。このリストには、チェコ語使用地域の出身にも拘わらず、国勢調査ではドイツ人として申告したプラハ商人の名前が記載されていた。

「ブジェズノフスキー議員は、特に1903年4月21日の議会において質問者に立った。この時彼は、国勢調査委員会の正式メンバーであるという職権を明らかに濫用し、国勢調査の際にプラハでドイツ語を日常使用言語として申告したユダヤ商人たちを、ボイコット・リストに載せるこ

とによって、彼らに重大な損害を与えようと企てた。チェコの新聞はこのリストを載せた特別号を印刷頒布して、チェコ民族の間に混ったユダヤ商人たちを、チェコの敵として糾弾しようとする目論みが最大の効果を挙げるよう画策した」⁽⁸⁰⁾

原注

- (1) Tribüne 9. 11. 1882
- (2) Fr. Engels' Briefwechsel mit K. Kautsky, Wien 1955, S. 65u. 70
- (3) G. Wolf: Die Juden. Wien-Teschen 1883, S. 163
- (4) Ebenda
- (5) Tribüne 2. 11. 1882
- (6) Ebenda 11. 11. 1882
- (7) Ebenda 15. 12. 1882
- (8) Vgl. I. Elbogen: Ein Jahrhundert jüdischen Lebens. Frankfurt 1967, S. 165f
- (9) Tribüne 11. 12. 1882. ローリング・スキャンダルについては Elbogen: Jahrhundert, S. 162ff 参照
- (10) Wiener Jahrbuch für Israeliten 1863/64, S. 78
- (11) Brandeis Kalender 1883/84
- (12) SUA PMT 1883/84
- (13) SUA PM 1880-1890; 8/1/9:1
- (14) Wolf: Die Juden, S. 161
- (15) SUA PM 1880-1890, 8/1/9:1
- (16) E. Wiskemann: Czechs and Germans. London-New York-Toronto 1938, S. 39ff
- (17) SUA PMT 1883/144
- (18) Wolf: Die Juden, S. 163
- (19) Ebenda, S. 164
- (20) H. Rauchberg: Der nationale Besitzstand in Böhmen. 3. Bde. Leipzig 1905, Hier Bd. 1, S. 152f. ; S. 389ff.
- (21) Ebenda, S. 391
- (22) M. Brod: Über Kafka, S. 11f
- (23) 最後のドイツ系・ユダヤ人学校閉校の辞 (『自衛』紙, 1913年2月7日号)
- (24) E. Leberer: Českožidovská otázka (チェコ系ユダヤ人問題) 参照
- (25) Politik, 25. 3. 1892
- (26) E. Lederer 上掲書 Smíchov 1899
- (27) Israelitische Gemeindezeitung 1891, S. 193

- (28) J. Braunthal: Victor and Friedrich Adler. Wien 1965, S. 134ff
- (29) Wiskemann: Czechs and Germans, S. 102f.
- (30) ドイツ系ベーメン地区の反ユダヤ主義に関する詳しい資料は SUA, PM 1880-1900; 8/1/9:1.
- (31) M. Brod: Streitbares Leben. München 1960, S. 154
- (32) 厳密な社会調査の方法を用いての, プラハ・ドイツ人社会の卓越した構造分析は G・F・Cohen: The Germann Prague. (Phil. Diss. Itarrard 1975) によって初めて行なわれた。
- (33) Israelitische Gemeindezeitung 1885, S. 181
- (34) Deutscher Volksbote 1891, Nr. 1.
- (35) Bohemia 15. 9. 1886: エガーの選挙民を前にしてのパロイター議員の演説
- (36) Selbstwehr 1908ff. に多くの実例。Kestenbergl-Gladstein: The Jews, S. 53.f も参照
- (37) Prinz in: Handbuch der Geschichte der Böhmischnen Länder. Bd. 3, S. 161
- (38) Ebenda, S. 161f.
- (39) Rauchberg: Der nationale Besitzstand in Böhmen
- (40) Deutscher Volksbote 3. 5. 1891
- (41) SUA PM 1880-90. 8/1/9:1
- (42) Israelitische Gemeindezeitung 1889, S. 26
- (43) Deutscher Volksbote 21. 2. 1897.
- (44) J. Šafařík: Vznik národně sociální stany v Rankoushu — Uhevsku a její vývoj do konce první valky (オーストリア・ハンガリー帝国における民族社会主義党の創設と第一次世界大戦末期までのその活動) In: O úloze byralé nár. soc. strany. Prag 1959, S. 32ff.
- (45) Archiv státního Židovského Muzea Praha (プラハ国立ユダヤ博物館文庫) Nv. 147657
- (46) Israelitische Gemeindezeitung 1897, S. 66
- (47) Ebenda 1897, S. 77
- (48) Deutscher Volksbote 28. 2. 1897
- (49) Ebenda 14. 3. 1897
- (50) Krebs: Kampf in Böhmen, S. 33
- (51) Deutscher Volksbote 26. 12. 1897. — Zum Dezembersturm vgl. : B. Sutter: Die Badenischen Sprachverordnungen. Graz-Köln 1960/64. Bd 2, S. 23 off. — Die Prager Schreckenstage. Dresden-Leipzig 1898.
- (52) Bohemia 6. 3. 1913
- (53) Archiv státního Židovského Muzea Praha, Nr. 147657

- (54) Wagenbach: Kafka, S. 19
- (55) Israelitische Gemeindezeitung 1897, S. 61
- (56) プラハの出身で、オーストリア社会民主党の創設者にして長年この党を指導したヴィクトール・アドラーは自分のことをこのように定儀している。C. Stölzl: Viktor Adler 参照 (In: Lebensbilder zur Geschichte der böhmischen Länder. Bd1. München 1974, S. 260)
- (57) F. Werfel: Einander. Leipzig 1915, S. 85
- (58) SUA PP 1893-1899: V/7/48
- (59) 奇妙なことに、イロヴィがユダヤ人であることはカフカの伝記のどこにも言及されていない。チェコの労働者運動に加わった、世紀転換期における若いドイツ系ユダヤ人の社会民主主義者については、E・E・キッシュ『プラハの冒険』参照 (Wien-Leipzig 1920, S. 121)
- (59) Deutscher Volksbote 12. 9. 1897
- (60) Wagenbach: Kafka, S. 62
- (61) Wansdorfer Hausblätter 16 (1898). S. 81
- (62) この事件については特に以下の書を参照。A・Nußbaum: Der Polner Ritualmordproreß. Berlin 1906. F・Červinka: The Hilsner Affair. Leo Baeck Institute Yearbook 13 (1968), S. 142ff. Österreichische Wochenschrift 1910, S. 25ff.
- (63) Nußbaum: Polna, S. 16f.
- (64) Ebenda, S. 16.
- (65) Ebenda, o. S
- (66) Ebenda, S. 30f.
- (67) Allgemeine Zeitung des Judentums 1901, Nr. 14
- (68) Zitiert in: Deutscher Volksbote 24. 9. 1899
- (69) Stölzl: Burg, S. 86ff.
- (70) Zitiert in S. Schwarz: Masaryk, Nürnberg 1949, S. 18.
- (71) Bezzel: Kafka-Chronik, S. 189
- (72) E・E・Kisch: Marktplatz der Sensationen, Berlin 1968, S. 29.
- (73) Selbstwehr 12. 1. 1912
- (74) Ebenda 27. 12. 1912
- (75) Österreichische Wochenschrift 21 (1904), S. 329.
- (76) Ebenda 18. 12. 1908
- (77) Interpellation L. Hofer u. Gen. 1903, zitiert in: Selbstwehr 18. 11. 1910.
- (78) Österreichische Wochenschrift 1909, S. 871.
- (79) Nußbaum: Polna, S. 37.
- (80) Die Neuzeit 1903, S. 198.

訳注

- (一) オーストリア・ハンガリー帝国は、1867年～1878年のほぼ10年間、富裕なブルジョアジーを基盤とするオーストリア自由党が政権を握り、多くの自由主義的改革を実施したが、1873年の経済恐慌を機に、自由主義は衰退に向かい、代ってより下層の広範な大衆を惹きつける新しい大衆的政治運動、即ち、シェーネラーのドイツ民族主義、ルエーガーのキリスト教社会主義、V・アドラーの社会主義・労働運動、Th. ヘルツルのシオニズム運動などが怡頭してくる。この間の事情についてはK・E・ショースキー『世紀末ウィーン』の第3章「新調子の政治」に詳しい。
- (二) Eduard von Taaffe (1883-1895) : カトリック保守派のターフェは、激化する民族闘争と階級闘争に揺さぶられ続けた19C末のオーストリア・ハンガリー帝国で、「妥協の名人」と称されながら1879-1893年の15年間の長期にわたって政権を担当し、諸民族、諸階級の宥和を図った。ターフェは1880年、高揚するチェコ民族主義への妥協として、ベーメン、モラビア両州で、ドイツ語と並んでチェコ語も公用語とする法令を出したが（「公用語法」）、これはチェコ・ドイツ語共によく話すチェコ人に有利であり（チェコ人は熱心にドイツ語を学んだが、支配者たるドイツ人はチェコ語を学ぼうとしなかった）、その結果、チェコ人官吏の大量登用をもたらし、ドイツ人の猛反発を招いた。多民族国家にあっては、言語問題即民族問題であった。
- (三) タルムード：「律法」(モーゼ五書)が成文律法であるのに対し、タルムードは「口伝律法」を意味する。律法の神の言葉を、聖書時代を下るにつれて生起する新たな状況の下で、初期の律法学者たちが時代に即して新たに解釈し直していった聖書解釈の判例集。タルムードはユダヤ人の生活全般を規定しており、トーラと並ぶ権威を持つ。
- (四) Georg Ritter von Schönerer (1842-1921) : 1882年「リンツ綱領」起草、1885年「ドイツ国民党」創設、矯激な大(汎)ドイツ主義者で、ハプスブルク家を倒し、その領土をドイツ帝国に編入することを主張した。彼の過激なドイツ民族主義、人種論的反ユダヤ主義、議会活動よりも街頭でのデモや暴力行為によって大衆に訴えてゆく闘争的な政治活動のスタイルは、当時、貧乏画学生としてヴィーンを浮浪していた若いヒトラーに影響を与えた。ヒトラーがヴィーン時代にシェーネラーやルエーガーから摂取したものは大きい。
- (五) Karl Lueger (1844-1910) : キリスト教社会党の指導者、また人気あるヴィーン市長として市の近代化に取り組み大きな業績を残した。ルエーガーは、反資本主義・反社会主義・反ユダヤ主義・親カトリック教会、親ハプスブルク朝の立場に立ち、現実的・大衆的・改革的な政策によって、広範な小市民層、農民など一般大衆の心理を巧みに捉え、これを新しい一大保守勢力に組織していった。ルエーガーの反ユダヤ主義は、シェーネラーの人種論的

- なそれとは異り、彼の「誰がユダヤ人であるかは私が決める」という言葉に示されているように、大衆の裡に潜む反ユダヤ感情をイデオロギー的に操作し利用することに重点があった。
- (六) Theodor Herzl (1860-1904) : ブタペスト出身のユダヤ人でウィーンで法律を学ぶ。学生時代の彼はドイツ的教養を身につけたドイツへの同化論者であり、ドイツ民族主義系の学生団体にも所属していた。卒業後、作家、ジャーナリストとして名を成す。1891年、Neue Freie Presseの特派員としてパリに赴くが、ここで当時フランスで高まっていた、ドレフェス事件を初めとする反ユダヤ主義の動きをつぶさに見聞し、自己のユダヤ人性とユダヤ人国家を造る必要性を痛感し、以後シオニズム運動の指導者として活動。『ユダヤ人国家』(1896)はシオニズム運動の礎石となった。
- (七) 1885年成立したバデーニ内閣は1897年、チェコ人の協力を求めるために「言語令」を出したが、これはターフェ内閣時代の公用語法以上にチェコ人に対する大幅な譲歩を内容とするものだったため、ドイツ民族主義者を中心とするドイツ人側の猛反対を招き、ドイツ人・チェコ人の対立は帝国全土で激化した。この混乱の中で1897年11月、皇帝フランツ・ヨーゼフは議会を閉鎖し、バデーニを罷免した。
- (八) 1894年、アルザス出身のユダヤ人でフランス軍砲兵大尉ドレフェスは、参謀本部勤務中、ドイツへの軍事機密売却の嫌疑で逮捕され、軍法会議の結果、悪魔島に流刑された。情報局長ピカールによる新資料の発見、軍法会議の裁判手続きの非合法制などが暴露され、軍部、教会、右翼、ゾラなどの進歩的知識人もまき込んでの国論を二分する大論争となった。その後、ドレフェスは無実を確認され復権した(1906年)。
- (九) チェコ民族主義の波に押されて、1882年、ターフェ内閣時代にプラハ大学はドイツ部とチェコ部に分割された。(同じ頃、1886年、従来のドイツ劇場とは別に、チェコ語で上演されるチェコ国民劇場もブルダヴァ河畔に創設された) Tomáš Garrigue Masaryk (1886-1948) : プラハ・チェコ大学の哲学・社会学教授、オーストリア国会議員となりチェコ独立に尽力。彼はリベラルな知識人であり、ヒルスナー事件への理性的な対応にもみられるように、青年チェコ派的な過激なショーヴィニズムには組しなかった。一次大戦中はチェコの外にあって西側連合諸国の支援を求めつつ、ベネシュと共にチェコ独立運動を続ける。一次大戦後に成立したチェコ共和国の初代大統領を務めた(1918-1935)。
- (十) 「出エジプト記」第12章で、神はイスラエルの民をエジプト人からの隷属から救出するに際して、イスラエルの民に7日間、「種なしパン」を食べよう命じている。これにちなんで、出エジプトを記念する「過越祭」の期間中、ユダヤ人は種(イースト)抜きのパン、即ち matzo (ドイツ語で Matze) を食べるが、この習慣にあてつけて、ユダヤ人の味方をしたマサリクは Maz-

1990. 6 C. シュテルツル『カフカの邪悪なペーメン』(2) (伊藤) 411 (1567)

zesryk と呼ばれたと思われる。なお、東欧から流入したユダヤ人が、かつて集中的に居住したヴィーン市第2区 Leopoldstadt もやはり昔、 Mazzesinsel と呼ばれていた。